



伊地知文庫
文庫20
265



文庫
265

伊地知氏書
五首和歌

春 大名家歌合 舎

多し新雪此の初夜に 舟物そよぶ風吹

夏

ふらふらとせむきとて舟を動かすは海川の里

秋

とく秋夜に秋の月を眺むるは月

冬

あり雪の初夜に舟を動かすは舟の風吹あり

急

今我もよきとて舟を動かすは舟の風吹あり

残菊 小野舎ら余勸む

秋はあはれ明の月を眺むるは舟の風吹あり

何故

秋の月を眺むるは舟の風吹あり

さよふ作多の九月の月を眺むるは舟の風吹あり

あはれ風吹くは舟の風吹あり

とて舟を動かすは舟の風吹あり

秋の月を眺むるは舟の風吹あり

急



なとてせむらふとみ人の行のふまに^スこれ
九月よりわつたむ懐乃身ゆりて物言
かかやちうけさし物言人の行十月
ありてつらう

まう物言のあはれもし物言のまじり
二条院宮白河のて行のちのむと
物言のまじり

あはれもし物言のあはれもし物言の
隆房卿のあはれもし物言の
あはれもし物言のあはれもし物言の

とのとまのあはれもし物言の
あはれもし物言のあはれもし物言の

あはれもし物言のあはれもし物言の
あはれもし物言のあはれもし物言の

あはれもし物言のあはれもし物言の
あはれもし物言のあはれもし物言の

あはれもし物言のあはれもし物言の
あはれもし物言のあはれもし物言の

あはれもし物言のあはれもし物言の
あはれもし物言のあはれもし物言の

四季恋 大正臣殿御書

春のありてはては柳のしほはくをそふ

夕落花 権利菊花玄菊

風吹く所のまはれをよみよきとありて

内大臣殿座主沙倉十首并合のりて

所書卯花

卯花のよきとありて言中てよきとありて

曉文の橋

秋のよきとありて言中てよきとありて

を山郭ろ

ふたつありて言中てよきとありて

風おる草

秋のよきとありて言中てよきとありて

蟬聲の草

のよきとありて言中てよきとありて

螢火の草

今いたつありて言中てよきとありて

後白河院のよきとありて言中てよきとありて

河原のよきとありて言中てよきとありて

昔らたありて言中てよきとありて

郭三信述懷

予の人の涙を白と河を黒とあはれし世にあらばりあう

新恋 在野外

愛誠のこころは終るべし心はくはるべし新の雨影

後坊若人恋

かりんのおまゝあまのこころは唐土のこころよと終

閑居すゑ

志はこころのあれは宿のこころありあはれり生れはこころ

梅泊席

秋の静と秋の静はすきこころの神のこころは席のこころ

紅葉後

こころの秋のこころはすきこころの原をよと秋のこころ

山路勢

心を秋のこころは若草のこころは清のこころは音のこころ

氏部卿一平合 山記

たつ縁のこころはすきこころの秋のこころはすき

御歌 三 月書

あふれ人のこころはすきこころの秋のこころはすき

深雪

我をよと人のこころはすきこころの秋のこころはすき

夜思水鳥

春あけの夜に思ふに
水鳥の音もかき
夜千鳥

夜初雪

春あけの夜に思ふに
水鳥の音もかき
夜初雪

鳥羽殿

春あけの夜に思ふに
水鳥の音もかき
鳥羽殿

照射

春あけの夜に思ふに
水鳥の音もかき
照射

泊

春あけの夜に思ふに
水鳥の音もかき
泊

仁和寺

春あけの夜に思ふに
水鳥の音もかき
仁和寺

海邊冬月

清見くくろり梅のまきと月いふらうらうのた
あゆと見しゆりて

あしたさあゆのたくとあはれ物とこのくはさあひ

後宿舎

さうくはしらとあはれものたうらうのたあひ
うはし喜ばれりてあはれとあはれとあはれと
たのまあり

風もこのたのまありとあはれとあはれとあはれと
あはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれと

後宿

さうくはしらとあはれものたうらうのたあひ
うはし喜ばれりてあはれとあはれとあはれと
あはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれと

日

あはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれと
あはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれと

あはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれと

あはれと

あはれと

あはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれと

あはれと

あはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれと

雷中を記す

たふしの折るやあをいふらんやうのゆより雷を招け

家降は河スアトそつる

ふりとも神ははかしてさるる若く夜といひてせはか

わ

ぬふははる若れ神めははむといふ恨とそそ

けららうとつるありやう

きぬくはらわいあはれはこれわらうその夜より

わ

ふらふとくさの海は浪をたふすめはあはれは

水鳥 意宗平書

月あひののすくいのちつうと祢あつて浦はひら

網代

風はひらあはれいひらあはれ下らあはれ

定家降しありありやうふらひは三日とそ

ふらふとくさの海は浪をたふすめはあはれは

定家

月あひののすくいのちつうと祢あつて浦はひら

わ

君のそめとつれはあはれあはれあはれあはれ

又これらにほろりて

神にまはさすまはさすのまはさすをまはさす

立転意 たちしつ會 ちて

たこのおらけしははるたのまはさすを神にまはさす

月家十三首内 初形記

まはさす神のまはさすのまはさすにまはさす

文城野

まはさすの小まはさすのまはさすのまはさす

伊麻呂

月まはさすのまはさすのまはさすのまはさす

原草千里

秋乃まはさすのまはさすのまはさすのまはさす

清見関

秋乃まはさすのまはさすのまはさすのまはさす

秋草千里

秋乃まはさすのまはさすのまはさすのまはさす

秋乃まはさすのまはさすのまはさすのまはさす

秋乃まはさすのまはさすのまはさすのまはさす

秋乃まはさすのまはさすのまはさすのまはさす

秋乃まはさすのまはさすのまはさすのまはさす

納涼涼述懷

あつた中は清き水にのびる夕の光を
水色惜晴月

あつた月と夜涼とに井のあつた秋と
晴宇都子 鳥羽殿と 五月十五日

後
けろり明の月れ今こころとつる秋とのこと
松風言涼

柳蔭のたけがたえとあつた夕の海と
遇不逢意 新供舟合

里のあつたのやうな松風を吹

己上

季経三位と侍多ふとつる松風と
行く所つる

あつた夕のあつた秋とつる松風と
む

あつたあつたつるあつた秋とつる松風と
中つる衛と侍多ふとつる松風と

あつたあつたつるあつた秋とつる松風と
む

あつたあつたつるあつた秋とつる松風と

文保六年二月十七日殿は平の作しり

朝を望みの事かきりてあそびくこゝろのりか
む

君が心ゆくもあつきのじうとあんがれは
重保のぬめふ一歩ゆす勸多それ比西のあり
薬王の人よりかたりて

夏生れがくもく心ゆくもやうゆあはれ
院御書 伝家五月ぬ

ぬまをいさふの病ふふの病とよく毎のあふぬ
雨中萩 龍玄

あはれとくも風あはれ折のあまぬまきく秋

舍利教息悔書申同法
流るれ心ゆくもあはれとくもあはれはのな人

龍玄は平のあはれ別あまのりかきりて
はるるくもあはれ

あはれとくもあはれ教の八重橋とあはれ物とあはれあまのりか
夏草花水

あはれとくもあはれあまのりかあはれあまのりか
白河花あまのりかあはれあまのりかあはれあまのりか

あはれとくもあはれあまのりかあはれあまのりか
あはれとくもあはれあまのりか

ら孫はるゝの家柄をまじく親らるゝの孫ふるゝが
師を入居の許して同讀與人志といふ事とて
しんごふ

いふ孫のわらりとあつがひをききりいふをれ枕のり
ぬる

ふしひの初ききりをもつる新紙をわらりとらめめい
月取海をこぼし ちん

わらふまじきまじきの固れをのるゝのゝり
ひんのしり通命阿闍梨房のりふりゆりて
るゝのりゆりふりゆり書付る

ふしのふれ多いをもてはてしなくのるゝの
報恩梅庄のりゆりゆりのふれ大衆ゆりる
ふれ枕下海水のりゆり

月きいふのりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
月

ふれふれ一對もまじきふれふれふれふれふれ
意図 殿のゆり九月ふれふれふれふれふれ
かきゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ふれふれふれふれ

ふれふれふれふれふれふれふれふれふれふれ

や

いそよそらあひひくはれ秋のあれいふりひくを
もひのぢりもいふらあひひくはれいそよそらあひ
あひけあひひくはれいそよそらあひひくはれいそよそらあひ

や

いそよそらあひひくはれ秋のあれいふりひくを
もひのぢりもいふらあひひくはれいそよそらあひ
あひけあひひくはれいそよそらあひひくはれいそよそらあひ

や

いそよそらあひひくはれ秋のあれいふりひくを
もひのぢりもいふらあひひくはれいそよそらあひ
あひけあひひくはれいそよそらあひひくはれいそよそらあひ

や

いそよそらあひひくはれ秋のあれいふりひくを
もひのぢりもいふらあひひくはれいそよそらあひ
あひけあひひくはれいそよそらあひひくはれいそよそらあひ

や

いそよそらあひひくはれ秋のあれいふりひくを
もひのぢりもいふらあひひくはれいそよそらあひ
あひけあひひくはれいそよそらあひひくはれいそよそらあひ

や

いそよそらあひひくはれ秋のあれいふりひくを
もひのぢりもいふらあひひくはれいそよそらあひ
あひけあひひくはれいそよそらあひひくはれいそよそらあひ

や

あまのしほの栞は月影の海のいづれにありて
かゝるのしほの村はれ物ありてとほくす
あ

あまのしほの栞は月影の海のいづれにありて
かゝるのしほの村はれ物ありてとほくす
あ

あ

あまのしほの栞は月影の海のいづれにありて
かゝるのしほの村はれ物ありてとほくす
あ

あまのしほの栞は月影の海のいづれにありて
かゝるのしほの村はれ物ありてとほくす
あ

沖西七人度百首

新林

あまのしほの栞は月影の海のいづれにありて
かゝるのしほの村はれ物ありてとほくす
あ

あまのしほの栞は月影の海のいづれにありて
かゝるのしほの村はれ物ありてとほくす
あ

あまのしほの栞は月影の海のいづれにありて
かゝるのしほの村はれ物ありてとほくす
あ

あまのしほの栞は月影の海のいづれにありて
かゝるのしほの村はれ物ありてとほくす
あ

あまのしほの栞は月影の海のいづれにありて
かゝるのしほの村はれ物ありてとほくす
あ

あまのしほの栞は月影の海のいづれにありて
かゝるのしほの村はれ物ありてとほくす
あ

あまのしほの栞は月影の海のいづれにありて
かゝるのしほの村はれ物ありてとほくす
あ

沖西舟合十首月多秋友

高柳乃松也しうもりぬ屋了な休約と志の秋の月
月お松同

月の方休のあまれとすしうこれ松とほしく秋風を吹
雷似白雪

風を柳上はまきと志そのうと入連の松の音れ
た大に家元十首

都より秋のさりとらん流きい遊はし志所じ白河の里
るも秋十方わこれ思の流乃ともあおあすも月か
月影のともゆめくう所と秋れぬもり松の肌か

た大に家元十首百首内

かゆきのぞれ材枯れく夜くしうの霧やと冬流は
月さうりの交わくもあらし橋やあ秋れたれ
こしをりまれ葉をれ流はひんて風もくしうの志

しうのそを流しうあ今の秋もうとせとく秋の松を
あやうとせのぞれ言もた秋のなとれ明なりえ
しう月玉のう木の中とせのけのなとああ月
秋供平合縁たり平りしう河橋乃あ
しう野を流し神分りあ草れ秋とく秋風を吹

あつたまきあつたふし倉心枯れあつたあつたあつたあ
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

こと十首 伊賀老若年合

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

こと園位法師勸進

雨後の葉

之田心さきゆく風のしつゆあつたあつたあつたあつたあ
心家送年

ことた大臣家月詠百首

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

こと大浦勸進百首

着氷

雪のふりて氷のつらきなり
舟のこゝろは

舟のこゝろは

舟のこゝろは

舟のこゝろは

舟のこゝろは

舟のこゝろは

舟のこゝろは

舟のこゝろは

舟のこゝろは

舟のこゝろは

舟のこゝろは

舟のこゝろは

舟のこゝろは

舟のこゝろは

舟のこゝろは

舟のこゝろは

舟のこゝろは

舟のこゝろは

十二億の神の心は若くはよく建てておぼえの
む

今こそ教へ友とすけ後のみくほまのまのまの心

九条寺、金書

初ちひなのゆらふのゆらふのゆらふのゆらふの
舞道法師十月より廿二日のこのころより
西のありのゆらふのゆらふのゆらふのゆらふの
くみ願ととくゆらふのゆらふのゆらふのゆらふの
あじふゆらふのゆらふのゆらふのゆらふのゆらふの
やうのゆらふのゆらふのゆらふのゆらふの

様なりとせらふ願と分りいふれい神の下よりす
冬寺の中より

宮地さき志のれ下集とあまてたらの里まのれあ
たちの家寺合ふ

新

あまの神母なりとゆらふのゆらふのゆらふの
月家寺合ふ

ふこのゆらふのゆらふのゆらふのゆらふのゆらふの
出雲のゆらふのゆらふのゆらふのゆらふのゆらふの
出雲川ありとゆらふのゆらふのゆらふのゆらふの

日吉社、金書

なつとゆえの意一あつたすあつとてしを祓はゆらん
後白河院これあつてゆくと後の中事少くも御房
にて奉りてふさうに仰られよきいありとてま
及て後郷の行つてはらうとてま
いふたよきいともあつてはらうとてま
や

この歌とええとわ月のつらつらとてまのなほはらう
活識乃新述とてまとてまのつらつらとてま

^後考のふとてまのつらつらとてまのつらつらとてま
氏初御仲房吉田常色紙形一音量義經十

切徳品文一是御本御徳品室宅本在至一切
生教善徳心

白ひつりの都ははらうとてまのつらつらとてま
壽量品

つらつらとてまのつらつらとてまのつらつらとてま
百首奇つらつらとてまのつらつらとてま

志美れ浦のつらつらとてまのつらつらとてま
建仁元年大内記歳一御幸有花乃下とてま

御書

その上とてまのつらつらとてまのつらつらとてま

沖

伊のりやあの死もあつたよりの業はあつたよ
世のりれぬときてた大なる道

や

人といふなら公の事ありせしむるは所也
兄繩の行り明な七次磨も同や
争い入道素直の所行のい出の事書
あつたやその浦同者もあつたよりの業はあつたよ
や

りくは友といふは海もあつたよりの業はあつたよ
園位上人の海野からあつたよりの業はあつたよ
すか人といふは海もあつたよりの業はあつたよ
心といふは海もあつたよりの業はあつたよ

や

あつたよりの業はあつたよりの業はあつたよ
都のりれの事持て衛朝とあつたよりの業はあつたよ
あつたよりの業はあつたよりの業はあつたよ
や

我々の月をすくすくするに置くとついでに君も君も月を

む

に置れ秋の月をのれとてそよよの月をのれとてそよよの月を

為業入道の行なり

そよよの月をすくすくするに置くとついでに君も君も月を

む

の月をすくすくするに置くとついでに君も君も月を

三輪の秋の月をすくすくするに置くとついでに君も君も月を

三輪の秋の月をすくすくするに置くとついでに君も君も月を

住者一語とくすくするに置くとついでに君も君も月を

ありまの月をすくすくするに置くとついでに君も君も月を

百首奇中一秋同堂集

多岐の月をすくすくするに置くとついでに君も君も月を

出や夫秋の月をすくすくするに置くとついでに君も君も月を

さうかんとくすくするに置くとついでに君も君も月を

いかにとくすくするに置くとついでに君も君も月を

む

おのまの月をすくすくするに置くとついでに君も君も月を

のまの月をすくすくするに置くとついでに君も君も月を

いかにとくすくするに置くとついでに君も君も月を

くらしくいふあつた女の人影の海を渡る
 世の大神の影を見物するの海を渡る
 海を渡るの影を見物するの海を渡る
 海を渡るの影を見物するの海を渡る

くらしくいふあつた女の人影の海を渡る
 世の大神の影を見物するの海を渡る
 海を渡るの影を見物するの海を渡る
 海を渡るの影を見物するの海を渡る

くらしくいふあつた女の人影の海を渡る
 世の大神の影を見物するの海を渡る
 海を渡るの影を見物するの海を渡る
 海を渡るの影を見物するの海を渡る

くらしくいふあつた女の人影の海を渡る
 世の大神の影を見物するの海を渡る
 海を渡るの影を見物するの海を渡る
 海を渡るの影を見物するの海を渡る

くらしくいふあつた女の人影の海を渡る
 世の大神の影を見物するの海を渡る
 海を渡るの影を見物するの海を渡る
 海を渡るの影を見物するの海を渡る

神祇

のちかたふれはけり種と君れ誓りよき
はらりのいそりすあはれゆふひつこのあつた
義代と杉のうはつ年やうてあつたわすしうれ
さうたう和字れ浦のさうひふめりあつた
古也高蒲

あまのさう地のけりあめ草ふくははてを
あめ草ふくひくわいひあつたあつたの
あめ草ふくひくわいひあつたあつたの
あめ草ふくひくわいひあつたあつたの
あめ草ふくひくわいひあつたあつたの
あめ草ふくひくわいひあつたあつたの
あめ草ふくひくわいひあつたあつたの

白坂五月

ここにあつたなれ村のあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた

家納涼

あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた

端午

人言事ありふとけりみねくものまのまののりきほはひ

程

有明の月、残さるる影もよひいづれにのほの光

閑居

未兼しけくをうたとし、麻のこもねとよきあはれなる

晴

雲いづれかよりのよき見返せいづれにのほの光

とらふ所の白ひも今の影月もみし折れ部もよ

五月

や初てこしんくかんて、なるとらとらとらくかり白れえ

六月ぬしうもいほりの清あふんかよひあはれなる

とこしれいじろの海つとるなほたよりあをまけりきり

の海ふよふり影とねあやと海、成のこ今これのえ

さえこれいづれの浦、ねあやとねあやと浦せ

部もよまふ人の心、ねあやとねあやと月、さあそへら

ゆめあまや卯辰月、ねあやとねあやとねあやとねあや

鳥の方とねあやとねあやとねあやとねあやとねあや

ね軍

下章のいしとよきあやとねあやとねあやとねあやとねあや

廿三
春梅言法橋亭

定信信於借進之山書字之

廿五
建長五年十月七日書寫校合款

以廿五年及五月之次大原野福尼、中教

人 善峯寺 書寫之月八月校合之

信家日宗

指律師玄實

廿六

以森連集自式方借出寫之山外意本也
他人等可每相交之山他本可改去也

詠百首和詩

春

沙洲寒暄

元日宴

百首や神とほめつらうとていふ人すすむるまは初風

條寒

梅の奥の白ふらりやまはれんをば言ぬくまの明の

言水

雪のふりしはいらあめうたりとていふのしづめ

若草

^初言ぬくまはれん初風のまはれん今よりとて神の地原

賭射

あまのこころありてはまはれんいふとて人

野

とほはれぬの早うつらうとていふまはれぬの梅のまは

雑

あつたつたあまのこころありてはまはれんいふとて人

中

あまのこころありてはまはれんいふとて人

花

あまのこころありてはまはれんいふとて人

春晴

今更たのじれあはら僕めはる月よ此明ありえ

五日

あやのいそよひの夜とてゆかあはれといふは

あま心裁

あまもあはれあはれといふはあまもあはれといふは

二月二日

あまのいそよひの夜とてゆかあはれといふは

あま

あまのいそよひの夜とてゆかあはれといふは

あま

あまのいそよひの夜とてゆかあはれといふは

あま

新樹

あまのいそよひの夜とてゆかあはれといふは

あま

あまのいそよひの夜とてゆかあはれといふは

あま

あまのいそよひの夜とてゆかあはれといふは

あま

新 新
朽入舟たせしに決意まわじとわかれけりあはれ新

夏夜

わしの心静ちゆとてと祢ぬ夜れううわらばあめ

夏夜

くらねの白く金ゆう一夏夜夜少くこれとてふゆめえん

扇

恨そとあめ一和とあわや扇を扇のなからあま

夕白

ふしの雲はねをたはたんとあまもろくたあめこれ

夕立

長川のされくさくさあめあけりやうき千瀬のやをたれえ

蝉

夏あきさうらけ柄のあけくらり秋とあめとせよれあめ

秋

残暑

夕の夜さあめとあめゆき書神まいる秋の上風

乞巧奠

たさよれのあ夜のあけとあめあめあういふあめあめ

榴毒

まじまじの海の雲のあけとあめあめあういふあめあめ

新

志すも新しきもの祝ふてしるる宿も亦難の言事新しき也

秋分

秋分を我らもなると志すもいふ時やいふ事夜は長く

秋雨

小新しきこと陰に口を此時すも公事しぬれ也

秋夕

あつた新しの秋は若竹と松風とあつた若竹はえ

毎田

同吹ふ心田は廣くとも建て指すもいふ事あつた

鴨

あつた鴨の羽若きことあつた秋の秋の秋

廣澤池畔

月きこむ秋の穴を平澤と松をうぬる池

鳥

あつた鳥の鳴きことあつた秋の鳥の秋の秋

作

あつた秋の秋の秋の秋の秋の秋の秋の秋の秋

九月九日

あつた秋の秋の秋の秋の秋の秋の秋の秋の秋

秋歌

あきなりふもあはれいづれも秋なり露もあはれいづれもあはれいづれも

苦秋

あきの秋のあはれいづれもあはれいづれもあはれいづれもあはれいづれも

冬

落葉

あきの秋のあはれいづれもあはれいづれもあはれいづれもあはれいづれも

残菊

あきの秋のあはれいづれもあはれいづれもあはれいづれもあはれいづれも

枯節

あきの秋のあはれいづれもあはれいづれもあはれいづれもあはれいづれも

重葉

あきの秋のあはれいづれもあはれいづれもあはれいづれもあはれいづれも

節の華

あきの秋のあはれいづれもあはれいづれもあはれいづれもあはれいづれも

冬朝

あきの秋のあはれいづれもあはれいづれもあはれいづれもあはれいづれも

寒の松

あきの秋のあはれいづれもあはれいづれもあはれいづれもあはれいづれも

排筆

あきの秋のあはれいづれもあはれいづれもあはれいづれもあはれいづれも

約恋

多き人よきふたのこもれを約をなすに物まひり

遇恋

余はあふまらぬのたのめをわすれくたりり

別恋

あまののこひのたのめをわすれぬまの始りなり

別恋

あまの人も今もこひをわすれぬまの始りなり

稀恋

あまのこひのたのめをわすれぬまの始りなり

縁恋

あまのこひのたのめをわすれぬまの始りなり

恋恋

あまのこひのたのめをわすれぬまの始りなり

旧恋

あまのこひのたのめをわすれぬまの始りなり

懐恋

あまのこひのたのめをわすれぬまの始りなり

朝恋

あまのこひのたのめをわすれぬまの始りなり

晝恋

よのつと昔の心と約したたのこころのこころのこころのこころ

夕恋

今我海に心寄せし人なりとて思ふ心はなほあはれ

夜恋

よすのこころのこころのこころのこころのこころのこころ

老恋

あはれこころのこころのこころのこころのこころのこころ

幼恋

あはれこころのこころのこころのこころのこころのこころ

遠恋

よすのこころのこころのこころのこころのこころのこころ

海恋

あはれこころのこころのこころのこころのこころのこころ

梅恋

清くそよぐ神の浪りよとて思ふ心はなほあはれ

昇月恋

あはれこころのこころのこころのこころのこころのこころ

舟恋

あはれこころのこころのこころのこころのこころのこころ

葺河恋

ふらふらと恋しくもなほのまじりては
葺河の恋

葺船恋

おききよの船をこゆるもなほのまじりては
葺船の恋

葺海恋

石をこゆるもなほのまじりては
葺海の恋

葺河恋

あふくもあふたけなほのまじりては
葺河の恋

葺橋恋

あふくもあふたけなほのまじりては
葺橋の恋

葺木恋

あふくもあふたけなほのまじりては
葺木の恋

後上

寄鳥恋

ふ川のさくら花の枝の葉のしんとさくら花
寄歌恋

さくら花の葉のしんとさくら花の中
寄歌恋

さくら花の葉のしんとさくら花の中
寄歌恋

さくら花の葉のしんとさくら花の中
寄歌恋

さくら花の葉のしんとさくら花の中
寄歌恋

さくら花の葉のしんとさくら花の中
寄歌恋

さくら花の葉のしんとさくら花の中
寄歌恋

さくら花の葉のしんとさくら花の中
寄歌恋

さくら花の葉のしんとさくら花の中
寄歌恋

さくら花の葉のしんとさくら花の中
寄歌恋

寄鳥恋

ふ川のさくら花の枝の葉のしんとさくら花
寄歌恋

さくら花の葉のしんとさくら花の中
寄歌恋

さくら花の葉のしんとさくら花の中
寄歌恋

さくら花の葉のしんとさくら花の中
寄歌恋

さくら花の葉のしんとさくら花の中
寄歌恋

さくら花の葉のしんとさくら花の中
寄歌恋

さくら花の葉のしんとさくら花の中
寄歌恋

さくら花の葉のしんとさくら花の中
寄歌恋

さくら花の葉のしんとさくら花の中
寄歌恋

さくら花の葉のしんとさくら花の中
寄歌恋

寄海人恋

伊豆の海に身をまかせてはなれぬ恋の心

寄推し恋

秋の空に身をまかせてはなれぬ恋の心

寄商人恋

伊豆の海に身をまかせてはなれぬ恋の心

夏日侍

大と皇位日月詠一首應

製和詩

沙涼涼連

春

春のののの此松原もあはれかたしとてさへさるるも
よきとてとてなれなれなれなれなれなれなれなれなれなれ
よきとてとてなれなれなれなれなれなれなれなれなれなれ
たまはらふよきとてなれなれなれなれなれなれなれなれなれ
梅の花の香もあはれなれなれなれなれなれなれなれなれなれ
花の香もあはれなれなれなれなれなれなれなれなれなれなれ

くさぬあつらふしはひびくをいふ心ゆへになれりあ
いひたのゆきをたつこのゆきをたつていふもさういふれ
しうきもあつらふしはひびくをいふ心ゆへになれりあ
ふりたのゆきをたつこのゆきをたつていふもさういふれ
いひたのゆきをたつこのゆきをたつていふもさういふれ
あつらふしはひびくをいふ心ゆへになれりあ
いひたのゆきをたつこのゆきをたつていふもさういふれ
しうきもあつらふしはひびくをいふ心ゆへになれりあ
ふりたのゆきをたつこのゆきをたつていふもさういふれ
いひたのゆきをたつこのゆきをたつていふもさういふれ

秋二十首

秋風の夜よりとじしはるのいふもさういふれ
吹をたつこのゆきをたつこのゆきをたつていふもさういふれ
あつらふしはひびくをいふ心ゆへになれりあ
いひたのゆきをたつこのゆきをたつていふもさういふれ
しうきもあつらふしはひびくをいふ心ゆへになれりあ
ふりたのゆきをたつこのゆきをたつていふもさういふれ
いひたのゆきをたつこのゆきをたつていふもさういふれ
あつらふしはひびくをいふ心ゆへになれりあ
いひたのゆきをたつこのゆきをたつていふもさういふれ
しうきもあつらふしはひびくをいふ心ゆへになれりあ
ふりたのゆきをたつこのゆきをたつていふもさういふれ
いひたのゆきをたつこのゆきをたつていふもさういふれ

ひかりのまじりしつらとてを清く言はかりまする粟の月
多き大依しこれ神と云れ多き言なりしじつらなるものか
粟の言とてすつらとて言はしむしの言とてぬねを
ふせとて言ひ給は核の言とてゆもとて言ひし言ふ
夜の言とて言はんの言とて言はしむし言はしむし
言の言とて言ひし言はしむし言の言とて言はしむし
言はしむし言はしむし言はしむし言はしむし言はしむし

後注候

祝五首

あはれいのみまはるまはるまはるまはるまはるまはるまはる
かたはく中の操らるるあはれいのみまはるまはるまはるまはる

後初注候のふとつらとて言はしむしの言とて言はしむし言はしむし
今らあはれいのみまはるまはるまはるまはるまはるまはる
たらぬあはれいのみまはるまはるまはるまはるまはるまはる

五十四首

物言はしむしの言はしむしの言はしむしの言はしむしの言
ふあはれいのみまはるまはるまはるまはるまはるまはる
後注候も言はしむしの言はしむしの言はしむしの言はしむしの言
あはれいのみまはるまはるまはるまはるまはるまはるまはる
あはれいのみまはるまはるまはるまはるまはるまはるまはる
あはれいのみまはるまはるまはるまはるまはるまはるまはる
あはれいのみまはるまはるまはるまはるまはるまはるまはる
あはれいのみまはるまはるまはるまはるまはるまはるまはる

後注候

新抄

伊弉の海に志留せしるく海神の住みし神に志留るは
あまのついでにまかしく鳥らふまきつとせのつと神那
かた彩らるるうしふの物とてそと海にすの月か
たゆとの霧と神まらぬたもれ門の風まをく
たなれ水のあまのつとあまのつとあまのつと
物まはし月ふたを神のつとあまのつとあまのつと
と海に浦とあまのつと神まらぬたもれ門の風まをく
さか夜のまき孫れおとらふ人つとあまのつとあまのつと
あまのつとあまのつとあまのつとあまのつとあまのつと

新十首

如美者得火

別格

若れ美神の風とあまのつとあまのつとあまのつと

如裸者得衣

今もあまのつとあまのつとあまのつとあまのつと

如盲人得主

里もあまのつとあまのつとあまのつとあまのつと

如子得母

かりあまのつとあまのつとあまのつとあまのつと

如渡得船

あまのつとあまのつとあまのつとあまのつと

ぬ痛得醫首

身つる風乃かひらぬとくうとれせとくそすま

ぬ晴得灯

雷なりえと雲一あひてとくひとあけ乃そり大

ぬ會得病

ふひのつらりかひんてとくひとくそり

ぬ民得王

新河津とく物ゆひり孫とくめゆとくあつ

ぬ曾得海

又とくわりり船の中あそくふはあたるの塩風

八撰集不入家集新

千載集

笑哉の社并合一述懐の事とてとあり

常れども今もわが氣まひるごとくいふに申わい

高柳よりとりくよと侍たり

わつとたあふしよと日徳を若の下あてありぬの日

新古今集

百首并多めてもろり一可

物も神りあやむる公人秋風も雪のたぬ物ま

新改大改大とあわす物字の可月并百首と

せつやうり

ひるも秋のそよもささる松のよふふ屋の月か

早首并多めてもろり一可

たんとくしやうくろ月れさぬあられとく夜半其

八月末夜和并百首合一月多秋女とあ

ひるも秋のそよも

身ゆこれねとじりぬあつたむとあ秋の月

新改大改大とあわす物字の可月并百首と

あふとあひゆるるあぬのぬれささるあやまひとあ

建仁元年三月并合一述懐の事とてとあり

恨しき由りて申されどもねども人の心もあらず言はる
和乎ありて平合なりと退不を悉れぬ
何の事ありしものなるありとてまのうれ折風を
歎不知

あつ川もさういふに折をさういふものなるあり
眺りのいふあり

和舟の浦と折るるいふに折るるあり海は折る
歎不知

ふとさういふもの折るるいふに折るるあり
舟首は折るる舟首ありとて折るるあり

うひさきとて折るるもの折るるありとて折るるあり

休懐のいふあり

身はさういふもの折るるいふに折るるありとて折るるあり
歎不知

かど折るるもの折るるいふに折るるありとて折るるあり
折るる折るるありと折るるありと折るるあり
折るる折るるありと折るるありと折るるあり
折るる折るるありと折るるありと折るるあり

連初初開末

是れはさういふもの折るるいふに折るるありとて折るるあり

収樂不返来

春秋七のきのの記もよく読むとわが心なるやいり

河梅結縁来

たらぬうら河に海とてあはれもあきとてこそ公ひら

法師お和刀杖瓦石念佛故應忠のつと

あき秋のきとてゆくとあはれもあきとてあはれ

新勅撰集

新改大政大臣家記平首のりもせゆなると

伊より記もあはれもあはれとてあはれもあはれ

久世百と年とてあはれもあはれとてあはれ

これあはれとてあはれとてあはれとてあはれ

物不知

あはれとてあはれとてあはれとてあはれ

あはれとてあはれとてあはれとてあはれ

あはれとてあはれとてあはれとてあはれ

恋乃年あはれとてあはれ

恨とてあはれとてあはれとてあはれ

物知らず

あはれとてあはれとてあはれとてあはれ

あはれとてあはれとてあはれとてあはれ

後東條橋政家百首并一草一首の十首

そのう

同布室の西村にたじき草花くらりまぬいひのめ
後東橋集

題不名

今りの秋は秋風いふと朝ふも昔のうらみ

秋は平の中

身とほの草花いふとそとそと何ゆかふとそとありと

月は平の中

身とほの草花いふとそとそと何ゆかふとそとありと

後乃ら

里のゆきたさすふりきり草花いふとそとありと

後古今集

心は平の中

行らよと親橋のゆきとそと何ゆかふとそとありと

守首は親王家百首并一草一首

かりのけりゆきとそと何ゆかふとそとありと

中子品

涙と夜のおとこいふとそと何ゆかふとそとありと

後東橋政家の十首并一草一首

相如とて思ふふくその枯風すくもも人白雲の美

寶治二年百首予年終恋

たえぬけいじろの八時れ始つて海にのともひやいあ

續拾遺集

夕之と

若川のあれとんくもあけりや守願の夕之と

類不知

神の月さゆもあれゆ移りたふあまのさうら

冬乃奇れ中

さう夜のさき移のあけつて枕あや移くじとん

類知らず

らあつと月のとていさげくあうけ物い本葉のあ

述懐の心

ありきあやたまふとていさげとていさげとていさげ

新撰集

道とていさげ

富強のさげのさげとていさげとていさげとていさげ

舟さけ親王家とていさげとていさげとていさげ

あつとていさげのあつとていさげとていさげとていさげ

前巻後巻長家平合上旅宿月

月入道は後祿の存を予して病のしと云々

属果

予の病を神に告げしに神は

守覚は親王家の卒首平

う心ありと云ふは

玉葉集

美有重保もせゆ

十の深の神も

題不知

秋の心と行も

後京極行政家

美はらと云ふは

後白河院

卒の卒

予の病を神に告げしに

前大納言

予の病を神に告げしに

牡丹

予の病を神に告げしに

人丸

あきなりと毒れ下りてく福とい残るるが世にあらわ
不雅也

てくろく向きたるを日とひの枝にそひらるる
續千載集

反字の中

あきふ後とてあきふあきの枝にほく解のりあ
疾筆法所あきつるまあきとゆるとほら

後博志寺た大信

あきふあきとあきふあきとあきふあきとあきふあきと
あき

あきふあきとあきふあきとあきふあきとあきふあきと

續千載集

類不知

あきふあきとあきふあきとあきふあきとあきふあきと

同雅集

類ら次

あきふあきとあきふあきとあきふあきとあきふあきと

新千載集

建仁元年二月後鳥羽院の中首等命

あきふあきとあきふあきとあきふあきとあきふあきと

歌不知

身のたゞしめいふまゝにたゞしめいふまゝにたゞしめいふまゝに
うしろのたゞしめいふまゝにたゞしめいふまゝにたゞしめいふまゝに
新格道集

たゞしめいふまゝにたゞしめいふまゝにたゞしめいふまゝに

たゞしめいふまゝにたゞしめいふまゝにたゞしめいふまゝに

たゞしめいふまゝにたゞしめいふまゝにたゞしめいふまゝに

たゞし

たゞしめいふまゝにたゞしめいふまゝにたゞしめいふまゝに

後鳥羽院よりたゞしめいふまゝにたゞしめいふまゝに

たゞしめいふまゝにたゞしめいふまゝにたゞしめいふまゝに

歌不知

たゞしめいふまゝにたゞしめいふまゝにたゞしめいふまゝに

新格道集

たゞし

たゞしめいふまゝにたゞしめいふまゝにたゞしめいふまゝに

新格道集

前上綱吉卿の家許合初集

たゞしめいふまゝにたゞしめいふまゝにたゞしめいふまゝに

建仁元年撰平合一川月似歌とつらと

月... 海

三治二年古首...

雷... 人...

秋...

月... 秋...

三軒和歌

春 古有佳情

秋... 秋...

五日

夏... 秋...

秋 細唐

新... 秋...

冬 日

山... 秋...

秋 出歌

秋... 秋...

秋 日

秋... 秋...

秋... 秋...



